

早稲田大学第一文学部卒業。東京大学司書退職後、中国、スリランカ等の大学で日本語教育を担当。現在、「日本語談話室」主宰。

「控えめ・慎みを失った日本文化」

かつて外国の大学で日本語を教えていた筆者には、外国人の教え子たちから、日本語に関する質問が、時々メールで寄せられる。辞書を引けば、大まかな意味は分かるが、その使い方のTPOは外国人には難しい言葉もある。彼らに分かり難い言葉の中には、現在ではもう使われなくなった「太陽族」、「全学連」のような死語もある。また、死語とは言えないまでも、余命少ないと思われる言葉もある。「明解国語辞典」(三省堂)では、この種の言葉を、「老人語」と称している。一般的には、殆ど使用されず、老人しか使わないので、いずれ消え去るであろう言葉、「湯殿」などがそれである。

最近受けた質問の中に、「さりげなく」という言葉があった。質問した人は、日本の大学に留学した経験もある優秀な学生だったが、この言葉を聞いたことがなく、使い方が分からないと言う。別の人からは、「たしなむ」という言葉について、同じような質問があった。これまた、今では、死語か老人語に属するものであろう。

「さりげなく」は「さり気なく化粧する」などと、目立たないようにする言動を言う。やたらに目立つことを良しとする風潮、自己PRなど絶えず自己主張をしていないと、足元を掬われるような熾烈な競争会では、「さりげなく」する親切や、控えめな言動が霞んで見えるのは至極当然かも知れない。

「たしなむ」という言葉は、何かコトが起こることを予想して、密かに用意したり準備したりしておくことを言う。それが実用にならなくてもよい。戦前多くの文化人に「好きな言葉」をアンケートしたら、この言葉が断然一位だった。

以上挙げた、「さり気なく」や「たしなむ」は、言わば日本人の控えめな態度や謙譲の美德を評価する社会でこそ、生きる言葉である。現代の「オレがオレが」と自己を押し出す社会には馴染まない。

しかし、世の風潮には逆らうが、さりげない言動や、目立たず自己抑制の利いた、控えめな物腰を評価する謙譲の文化を、もう一度見直してみても如何だろうか？間違いなく、以前の日本には、「さり気なく」部屋の一隅に花を飾るような、謙譲の文化があった。ぎらぎらと欲望剥き出しの競争や、押し付けがましい商業主義から一步引いた控えめな文化が確かにあった。

言葉というものは不思議なものである。その言葉を知ることによって、今まで見えなかったものが、はっきりと見えるようになることがある。最近、「花眼」という言葉を知った。「老眼」のことである。老人になって、本当の花の美しさが分かる、という意味である。以来「老眼鏡」を「花眼鏡」と呼ぶことにしている。老眼鏡をかけるのをためらっている友人が僕の命名法を知って、一転、老眼鏡をかけることが嬉しくなってきたことにした、と話してくれた。

ぎすぎすして潤いのなくなった日本の社会に、「さりげなさ」や「たしなみ」という言葉をもう一度復活させることによって、かつて在った、落ちつきや控えめ、繊細な感性に基づいた価値観が再生することを願っている。